

及川ふみと幼稚園

津 守 真

及川ふみ先生と私が知りあったのは、終始、幼稚園を通してであった。

最初は、昭和二十八、九年ころ、私が留学から帰ったばかりのころ、附属幼稚園園長室でしばしば、お話を伺ったことがある。私は幼稚園の実感についてまだ知らなかったことが多く、小さなことにいたるまで、思いつくとすぐに質問をしに出かけていった。そのたびに、幼稚園のことはまず保育室にいつて見ることですよ、といわれて保育室に出かけていった。

先生は、四十年間にわたってお茶の水の附属幼稚園にとめられた。その期間は、日本の幼稚園がいくつかの重大な変化に出会ったときであった。その第一は、大正六年に倉橋惣三先生が附属幼稚園の主事となられたときで、それまで行なわれていた会集を廃止し、フレール伯の恩物を籠の中にあけてしまった

ときであった。それは日本の幼稚園の新教育のあけぼのであった。及川先生はそのころのようすを身辺に見た目撃者であり、また推進者である。そのころのことを語られる先生の顔はたいへんにうれしそうだった。「わたしはピアノがへただったから、会集のときみんなの前でピアノをひかないですんだときは、ほっとしたんですよ」と、にこにこ顔であった。

そのころのことは、幼児の教育、六十二巻十号（昭和三十八年）に書かれている「新しい保育の胎動期」六十四巻十号（昭和四十年）の「倉橋先生の思想と生活」などにくわしい。私は以前に、「幼児の教育」誌の古いものを、明治大正のころから、見直してみたことがあったが、子どもたちの遊びを中心とした保育、誘導保育のほとんど最初の記録が及川先生の報告である。それは「八百屋遊び」として、大正十四年に掲載されたも

のであるが、六十四卷十号の中に再録されている。

そのとき以来、お茶の水の幼稚園は、自由遊びを主とする現在の幼稚園の道を歩みはじめた。及川先生はこの実際保育面での推進者であった。そしてそのことのためにいっしょうけんめいに努力された方であった。あまりにいっしょうけんめいに努力されたあまり、ときには他人からは偏っているとみられたり、頑固と思われたりすることもあったことを知っている。その点では決して円満とはいえず、むしろ敵をもつことも多かったと思う。しかしそれは、お茶の水の幼稚園の新教育を貫き通したいとの強い願いから出たものに他ならない。

私及川先生を知ったのは、終戦の混乱期を過ぎた頃である。前にも記したように、留学から帰らたての若年の私を、先生はしばしば職員の研究会に招いてくださり、私などの話すことを熱心にノートに筆記しておられた。新しいものを取りいれようとする先生のひたむきな前進力にはおどろいていた。そしていまからかんがえると、ずいぶん思いきった実験研究のようなことを、ぜひやったらと先生の方から提案されて、試みたこともいくつかある。

当時の幼稚園一般の物的条件はたいそうわるく、「お茶の水は広い保育室をもち、一組の人数も少ないから、遊びを主とする保育ができるのだ」といわれていたことをたいそう残念が

り、「もっと悪い条件でもできることを証明しましょう」とい
いだされたこともある。(いまは物的にもっと恵まれた条件に
ある幼稚園がたくさんあるが、当時は一組の人数が四十人以下
に守られることも少なかった)それで、あるときは、一部屋で
保育する子どもの人数をいつもより増して観察する試みをした
こともある。

先生は幼稚園のことにすべてを注ぎこんで生涯を貫かれた。

このことはおそらく先生を知るすべての人が認めるところで
あろう。先生はよく、「この道」に一筋にといいことをいわれ
た。幼稚園の現場人として、幼稚園の現場を何とかしてよくし
ようと、寝ても覚めても幼稚園、幼稚園といつて「この道」に
初めから終りまで貫き通された。

先生の葬儀のときに読まれた「般若心経」の中の次の箇所は
先生の生涯をあらわすように思われて印象的である。「菩提心
を發すおこというは、己れ未だ渡らわたざる前に一切衆生を渡わたさんと發
願しねがひむなり」

先生は自分の下にいる人を、いつも自分より前において、そ
の人のために心を砕いておられた。先生は、内には心こまやか
に、外には幼稚園の本筋を貫くために戦われたのである。